

★ 操 作 方 法 ★

ページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。

※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。

※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。

吉沢やすみ



貝塚ひろし先生の「まんがマニア」に投稿
弟子入りのような形でアシスタントに

プロフィール

1950年山梨県に生まれる。山梨県日川高等学校卒業後、貝塚ひろし氏のアシスタントになる。1970年「週刊少年ジャンプ」にて『ど根性ガエル』でデビュー。デビュー作が代表作となる。



ああ「まんがマニア」。懐かしいなあ。これ、

貝塚ひろし先生が個人で出していた漫画誌ですよ。若い漫画家を育成するのが目的で、ストーリー漫画とギャグ漫画の両方を募集してたんだよね。それで僕、ギャグの方だったから1コマ漫画とか4コマ漫画を20本ぐらい描いて投稿したんです。そしたらなんと全部載っちゃってね。掲載されたら点数がもらえるんですよ。絵が何点、

アイデアが何点という風にね。その点数が合計で二百点になったらチャンピオンになれるんだけど、全部載ったその一回だけでチャンピオンになっちゃった(笑)。

それで高校2年の冬休みに貝塚先生のところ遊びに行っただけです。僕、実家が山梨だったんだけど、何も連絡しないでいきなり東京に行っちゃった。でも先生はこころよく迎えてくれて。

いろいろ話していたら今度の夏休みに来ないかと言われて。高校3年の夏休みに一か月間先生のところにお世話になって、アシスタントみたいなことをしていたのね。当時先生のところには、7人ぐらいのアシスタントがいたんだけど、そのうちの3人ぐらいが寝泊まりしてて、僕も一緒にそこで寝かせてもらってました。高校を卒業したらうちに来ないかと言われたので、正式にアシスタントになったんです。というか、弟子みたいな感じかな。

漫画家になりたいと思っただけなだけだ、僕、母子家庭だったんですよ。うちの親父っていうのが地主の長男で、けっこう土地とか畑を持ってたんだけど、「飲む・打つ・買う」を全部やってた人で、借金をこさえて全部取られちゃったんです。それで名古屋に出稼ぎに行くとか言って、それつきり。蒸発しちゃったんだよね。

残されたお袋は水商売をしながら僕と弟を育ててくれて。で、お袋の唯一の楽しみが小説を読むことで。貸本屋で週に何冊か本を借りてくるんだけど、漫画本も一緒に借りてきてくれてね。

読んだのは「少年」と「まんが王」。あと「冒険王」かな。いちばん好きだったのは「少年」でした。手塚先生の『鉄腕アトム』とか。あと「影」とか「街」などの劇画も好きでしたよ。さあ、白土三平さんの『忍者武芸帖』が好きだったなあ。

中学に入ったところから漫画のまねごとをし始めてね。家がそんなだから高校行かないで働きながら漫画を描こうと思ったわけ。でもお袋が高校ぐらいは行けと。周りの目もあるし。それで高校は行ったんだけど、勉強はしなかったなあ。旺文社の「高一時代」に漫画を投稿して載っ



まんがマニアの裏表紙、吉沢さんの投稿作品が掲載されている

たり、「映画の友」とか「近代映画」といった映

画雑誌に俳優の似顔絵を描いて何回か載りまし

たね。でも絵はあんまり上手くなかった。当時、

手塚先生の「COM」にも投稿しようかと思った

けど、みんな絵が上手いし。自分にはとてもじゃ

ないけど描けないという感じがあつたんだよね。

でも貝塚先生の「まんがマニア」はそこまで上手

くなくても載せてくれたし。まあそういうこと

もあつて貝塚先生のアシスタントになつたんだけ

ど。



アシスタントの合間に描いた『ど根性ガエル』
読み切りが評判になり連載が決まった頃

貝塚先生のところには2年間お世話になつた

んだけど、あんまり戦力にならなかつたと思う

よ。だつて辞めるまでにやった仕事というと、消

しゴムかけとベタ塗り、あとトーン貼りぐらい。

入つて3か月ぐらいで斜線を引くように言われ

たんだけど、けつこう緊張しちゃつてね。10分で

引けるものを半日ぐらいかかっちゃつた(笑)。

アシスタントの先輩

たちは速いんです。

シャツシャツつて

ね。しかも上手いし。

で、僕は何をやっ

ていたかというと、先

生は喫茶店でネーム

をやるんだけど、そのときなぜだか僕も連れていかれてね。先生がアイデアを絞っているときに話しかけてきたりして、その相手をしていました。

楽と言えば楽かもしれないけど、ほかのアシスタントはペン入れたり背景を描いたりしていたわけで、よく先輩たちに言われましたよ。お前はコーヒー飲んでるだけでいいな、って（笑）。

だから先生の原稿に関しては、ほとんどペン入れましたことはない。ただ、一回だけありました。

先生が「少年サンデー」でやった『あばれ王将』という作品があったんだけど、編集部が原稿をなくしちゃって。だから単行本にするときに、

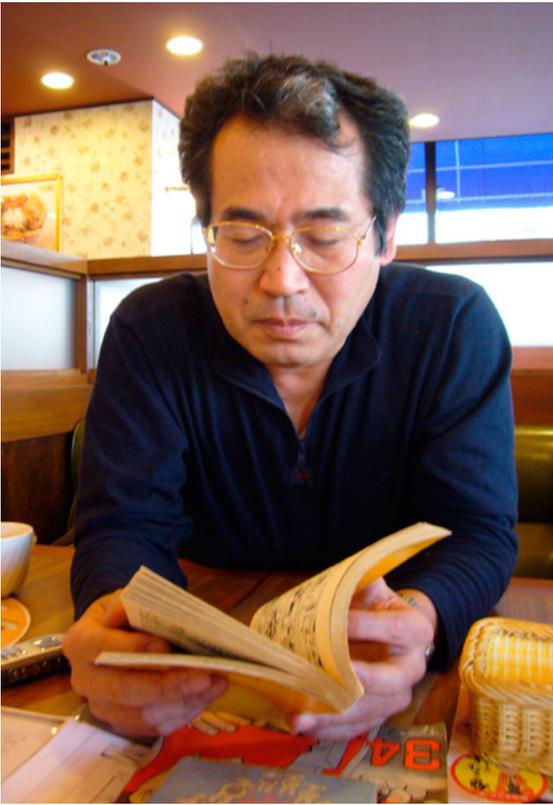
僕ともう一人のアシスタントで、「サンデー」の『あばれ王将』にトレーシングペーパーを貼って、上からトレースしたことがありました。単行本1冊分だから、けっこう時間がかかりましたよ。1か月かかったかな。でも今思うとね、その

トレースで絵を覚えたんじゃないかと。先生のところで絵の勉強をしたのは、そのときだったと思う。

先生からはオリジナルを描けとはよく言われていました。でもなかなか休みがなくて、月に3日か4日ぐらいしかなかったかな。それでも合間にいろいろ描いて、アシスタントになって1年半ぐらいのときに描いたのが『ど根性ガエル』だったんです。先生に見せたら、結構面白い、ということでも当時『父の魂』を連載していた「少年ジャンプ」の担当編集に見せたんです。それでまず読み切りということでも載せてもらったわけ。

そしたらけっこう評判が良くて。すぐ編集部から電話がかかってきて、とにかく10本描きためろと。そしたら連載にするからと。それを先生に伝えたら「じゃあお前、すぐうちを辞めろ」と言われました。辞めるのは少し勇気がいったんだ

けど、ほら、住み込みだから遊びも知らなかったし、酒もタバコもやらなかった。たまの休みという映画を見に行くぐらいで、半年ぐらい何もしなくても食べていけるくらいの貯金があったんですよ。たまたま先生のチーフアシスタントの人が近くのアパートに住んでいて、その人が結婚して引っ越すことになったから、いい機会だからそのアパートに入って『ど根性ガエル』を描き始め



たんです。それが70年の3月か4月の頃。それから3か月ぐらいの間で描きためて、7月から連載が始まったんです。そのときはこんなに長く続くととは全然思ってたけどね。



「平面ガエル」誕生の秘密
それほどすごい発想ではなかった

いろいろな人から、「平面ガエル」という発想はどこから来たのかと聞かれるんだけど、実はあんまり深く考えてなかったんだよね（笑）。最初は泥棒の話を考えてたんですよ。泥棒が頭にサングラスを乗せているんだけど、カエルのシャツを着ていてね。そのカエルも頭にサングラスを乗せている。で、泥棒に入るときにサングラスをかけるんだけど、カエルもサングラスをかけるという。最初は単なるギャグとして考えていたんだよね。それだとあんまり面白くないので、じゃあ

少年のシャツにカエルが張り付くことにしちゃうと。それくらいの発想。

これは『ど根性ガエル』の連載が終わる頃に編集者から聞いたんだけど、読み切りのときは読者の人気投票で3位ぐらいになつてすごく良かったらしんです。でも連載が始まると人気は下のほうでね。「ジャンプ」って人気がないと10回もいかないで終わっちゃうじゃない。だから7回か8回で終わろうという話が出ていたみたい。ただ、そのときにちょうど京子ちゃんが転校してくる回を描いたら、人気が上がったらしいのね。それでしばらく様子を見ようということになったと。当時はそんなこと知らなかったけどね。こっちは必死で描いているだけだったから。

京子ちゃんが登場するまでは、主人公のひろしとピョン吉、あとは後輩の五郎ぐらいだったからね。梅さんとかゴリライモとか。だんだんキャ

クターが増えていったのは良かったかな。あのね、ピョン吉って何もできないんですよ。ひろしに何か文句を言うとか、シャツを引っ張るぐらいで。これが変に超能力があつて「平面光線」(笑)とか出して、何でも平面にしちゃうような設定にしたら続かなかつたと思う。

連載から2年ぐらいでアニメが始まった頃は、お金がどんどん振り込まれるようになってました。使つても使つても入ってきちゃうわけ。それで勘違いしちゃったんでしょう。編集者と銀座のすごいお店に行つたりしましたけどね。貝塚先生は僕の成功をすごく喜んでくれましたよ。アニメが始まった頃に結婚したんだけど、仲人もしてもらいましたしね。アシスタントで一番の出世頭？ うーん…どうなんでしょうねえ(笑)。



人気漫画家であり続けることのつらさ
漫画から逃亡してしまった暗黒時代

単行本で10巻目ぐらいまで来た頃かな。だんだんきつくなってきたねえ。アイデアが浮かばないというのもあるし、どんどん描いていると、漫画家としての目が肥えてくるから、自分の描いたものに満足がいかなくなってくるんだよね。ネームを考えてペン入れをしていると、こんなはずじゃないと思っちゃって。それでごちゃごちゃいじるとますます変な感じになってね。初期の頃のような勢いがなくなっちゃって。

『ど根性ガエル』の初期に、ピヨン吉が船を運んでくるっていう話を描いたんです。ピヨン吉は目が回るから洗濯機が苦手。だから特訓ということで船のスクリーンに貼り付けるんだけど、その船が沈んじゃう。それでピヨン吉が船を引つ

張って帰ってくるっていうのを描いた。ポーンポーンと船がジャンプしながら帰ってくる。そのときは描けたんですよ。勢いでね。でも船がジャンプしながら帰ってくるわけだから、そんなことしたらビルは壊すだろうし、人も死んじゃうなって（笑）。そう思うようになって、アイデアが出なくなっちゃった。ギャグ漫画なんだから何でもいと思うんだけどね。たとえアイデアが出たとしても描けなくなつた。

でもまあ『ど根性ガエル』に関しては、きつかったけど何とか最後まで行けたんだよね。いちばんきつかったのは終わってから。普通、連載が終わったら半年ぐらい休むんだけど、終わった次の週から新連載だったからね。編集者と何回も打ち合わせをして、じゃあこれで行きましょうというところで始めたんだけど、駄目なんですよ。人氣出ないんですよ。そのあと何本か連載をやっ

ただ、みんな半年ぐらいで終わっちゃった。今思うと、編集者がキャラクターやストーリーはこうしようかと全部決めていたんですけど、主人公と設定だけ決めて、あとは自由にといい形で始めた方が良かったかもしれない。

「ジャンプ」以外でも連載をやったりしていたんだけど、あまりいい感じじゃなくてね。あれは『ど根性ガエル』が終わって3年ぐらい経った頃かな。仕事場に行こうとして自宅を出ただけで、逃亡しちゃった(笑)。連載が5、6本ぐらいあったんだけど、全部落としたんです。

おまけにその頃、税務署の査察が入ってね。当時は全部税理士に任せていたんですけど、接待交際費の項目がずさんだったみたいで、追徴金が1千万円以上来ちゃった。稼いでいるときだったらよかったんだけど、『ど根性ガエル』が終わって4年ぐらい経っていて、来たからどうしようか

と。そのとき自分の家とマンションを買っていたんだけど、マンションを売って追徴金を払って、残ったお金で自分の家のローンを払ったんです。だから家だけは残った。それは全部女房がやってくれました。僕が漫画を描けなくなったときに、女房は看護師の資格を持っていたので、病院に働きに出てくれましたしね。苦労したのは女房のほうが大きかったんじゃないかな。もう頭が上がりません(笑)。



いつもピョン吉が助けてくれた漫画家人生自由に描ける機会があればまた描きたい

漫画をやめた頃、所沢に西武デパートができたので、そこでガードマンをやることになったんです。そのあとうちの娘と息子が大学に入る年齢になったときに、TBSで江口洋介さん主演の『ひとつ屋根の下』が始まったんです。それで江



『ど根性ガエル』第1巻 集英社発行



当日単行本に描いて頂いた
『ど根性ガエル』のサイン

口さんが『ど根性ガエル』のファンでピョン吉Tシャツを着たいと言ってきてね。もちろんOKです。だから着てくださいという感じだったんだけど、あれで人気が再燃して、2、3年食えたんですよ。『ど根性ガエル』のアニメもリメイクされたし、CMでも使われてね。困るとピョン吉が助けてくれるんです(笑)。

どこに行っても『ど根性ガエル』に戻っていくところがあるんですよ。初めて描いた漫画が連載になってアニメになったわけだからね。すごく運が良かったと思うんだけど、それがあつたから逆に描けなくなつたというのはある。新人の頃にまず2、3年苦勞してか

ら『ど根性ガエル』を描いたらまた違ったかもしれないね。

このところ漫画は描いてないねえ。キャラクターは契約している版權管理会社にやつてもらつているし、もう漫画はいいかな、と。でも本当に自由に描けるんだつたら描いてみようという気持ちはあるかな。これまでの漫画家人生を振り返つてみると、いつも受けるものを描こうという気持ちがあつた。だからそういうものを考えずに描けるんだつたらいいと思います。

娘は今では漫画家になつています。親の影響？ うーん…それはあんまりないんじゃないかな(笑)。単行本が出たら見せてもらおうぐらいですけど、今風の漫画だしね。読んでもなかなかわからないし。逆に息子の方は、僕の苦勞を見ていたせいか、ちゃんとした資格を取つて仕事をすると行って、今ではレントゲン技師です。面白い

よね。僕が漫画家で女房が看護師だから、子供たちが両方の職業に就いている（笑）。

お袋は7年前に亡くなりました。親父もその1年後ぐらいに亡くなったようです。親父の親戚から聞きました。実は親父が蒸発して12年ぐらい経ってから親戚から連絡があつてね。親父が体をこわして入院していると。それで僕の漫画を見て涙をこぼしているから会いに行つてやつてくれないかと言うわけ。でも会いに行つたらお袋を裏切るような気がしてね。結局会いに行かなかつた。ただ、親父の骨はお袋と一緒に墓に入れることにしました。

最近は孫の世話が楽しくてね。息子夫婦の子供なんですけど、いま2歳です。もう可愛くて。

自分の子供を可愛がることはあまりなかったから余計にね。もう少し大きくなったら、お祖父ちゃんが『ど根性ガエル』を描いたんだよつて教

えられるかも（笑）。

●インタビューを終えて

『ど根性ガエル』は私が小学生の頃、大好きで夢中になって読んでいた漫画でした。そんな子供の頃の大ヒーローである吉沢先生に、ご自分の波瀾万丈な人生をぎくばらんに語っていただきました。『ど根性ガエル』の第1巻の前書きに吉沢先生はこう書いています。「65年後、この漫画を思い出してくれる人がいたらほかあ、もう死んじゃったつていいんでやんす」。百年後だつて残ると思いますよ、吉沢先生。

文／中島泰司

2009年10月10日

石神井駅近くのファミレスにて